



垂水市史には、天保2（1645）年の縄張帳が添付されています。縄張帳を見れば、当時の道路が現在まで、そのまま残っていることが分かります。ご興味のある方は、社会教育課まで。
☎ 0994-32-7551



▲天保2年の縄張帳

垂水麓の特徴

垂水麓には残念ながら出水麓等にあるような武家屋敷群は残っていません。しかし、垂水麓は日本遺産の11ある麓の中で唯一、島津一家（垂水島津家）による格式の高い麓です。広大な範囲で整然とした格子状の区画が広がっていた当時の麓の場所が、そのまま市街地として発展し、現在でも格子状の区画がそのまま残されているのが特徴です。

島津一家とは、島津本家の分家（重富家、加治木家、垂水家、今和泉家）のことです。垂水島津家は江戸時代に垂水を治めた島津の分家であり、江戸時代半ばには、学問所「文行館」を建てるなど、学問や文化に関する事業が知られています。また、大隅に睨みをきかす防御の要として設置されたことも特徴にあげられ、大隅の重要な麓だったのです。

垂水には、あと2つの麓がある？

▶**新城麓** 松尾城の平地に設けられたお飯屋を中心に広がり、家臣たちの屋敷も配置され、垂水島津家第4代久信の子・久章を初代として、4,700石の新城島津家が創建されました。西郷隆盛もよく新城を訪れたとされており、多くのエピソードが残されています。

▶**牛根麓** 島津氏が伊集院久通を地頭として支配させ、その後は地頭を常駐せず、麓のお飯屋において、政治行政の中心地として、地元の名家が世襲しながら牛根郷を治めていました。お飯屋跡の周辺には、市指定文化財の広田家の庭園が残されています。



▲牛根麓・広田家の庭園（過去撮影）



春風とともに 垂水麓を歩く

日本遺産とは・・・

日本遺産とは、各地域の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定し、魅力ある有形・無形の様々な文化財を活用し、地域活性化を図ろうとするものです。

身近にある日本遺産「麓」

垂水に日本遺産があることをご存知でしょうか。令和元年5月、県内で初めての日本遺産となる『薩摩の武士が生きた町々』武家屋敷群「麓」を歩くが認定されました。そのひとつに、現在の垂水小学校を中心とした『垂水麓』も含まれています。

江戸時代、薩摩藩は他藩より武士の人数が多く、約4分の1は武士だったといわれています。外敵からの攻撃に備え、本城である鹿児島城を中心に、各地に外城を配置し武士たちを住まわせました。これは、薩摩藩独自の外城制度と呼ばれるものです。

麓とは、外城の中心部を形成していた武家屋敷群のことです。防御に適した場所に作られ、門と玄関の間に生垣を配置するなど、城を模した構造となっていました。薩摩藩の領内には、約120カ所もの麓があったとされています。平和な江戸時代において、幕府や他藩の武士たちが武芸をおろそかにする一方で、薩摩藩の武士たちは、心身を鍛え、農耕等に従事し、武芸に磨きをかける日々を、麓で過ごしていたのです。

400年以上前に形成され、かつて多くの武士の生きた垂水麓を歩き、薩摩の武士の文化・伝統を楽しんでみてはいかがでしょうか。